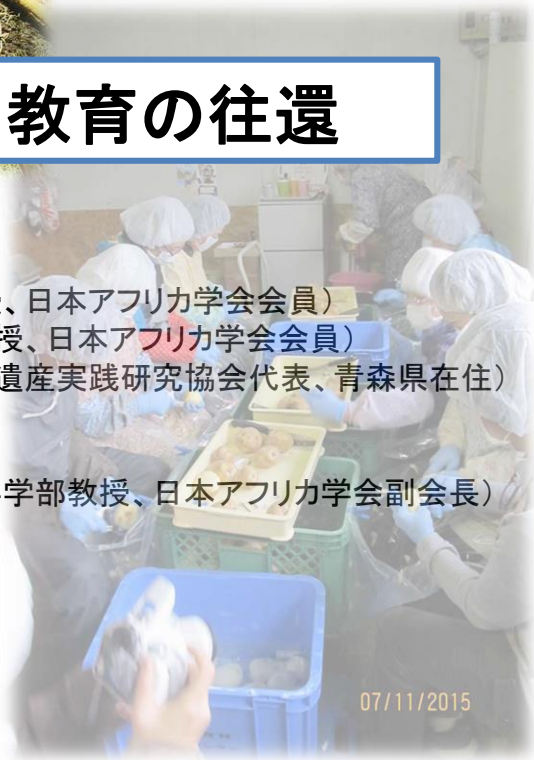
2019年2月17日（日）14:00～17:00
於　弘前大学人文社会科学部
4階　多目的ホール

事前申し込み不要
参加費無料
（中途入退場も可能です）

地域における実践と研究・教育の往還

話題提供：
佐々木重洋　氏（名古屋大学教授、日本アフリカ学会会員）
宮脇　幸生　氏（大阪府立大学教授、日本アフリカ学会会員）
下田　雄次　氏（北東北無形文化遺産実践研究協会代表、青森県在住）

コンビーナー：
杉山　祐子（弘前大学人文社会科学部教授、日本アフリカ学会副会長）



近年のアフリカ研究では、地域の潜在力をみすえた実践を組み込みつつ、アクションリサーチの手法を用いた試みが多くなされている。同様の傾向は、日本国内の地域研究にも共通している。地方大学は地域の課題解決や地域への貢献を強く求められており、アフリカ研究を専門としていても、同時に日本国内でそうした活動を続けてきた研究者も少なくない。しかし現状では、それらの活動は個々の研究者・研究チームそれぞれによって担われており、相互に十分な情報交換や議論を積み重ね、手法化をめざす機会はきわめて限られている。

本企画では、地域における組織化を含む実践と研究・教育に興味深い活動を続けてきた研究者・実践者が集まり、相互に十分な情報交換や議論を積み重ねることによって、アフリカでの蓄積と日本での蓄積の交差の中から、インターローカルな研究・実践の手法と方向性をみいだすことを目的とする。

主催　日本アフリカ学会東北支部会
共催　弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
※　日本アフリカ学会2018年度支部活動活性化支援事業

プログラム

14:00　開会挨拶

第Ⅰ部　パネリストによる話題提供　14:05～15:30

1. 宮脇　幸生（大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科 教授）

【話　題】 エチオピア西南部の農牧民ホールは、男性が力をもつ家父長制社会である。その中で、女性たちが「女性組合」の活動を通して、いかに自らの政治・経済的な自己決定の力を獲得してきたのかをお話しする。

【研究歴】 1985年よりエチオピア西南部で、農牧民社会を対象に人類学的調査・研究を行なってきた。エチオピアが国家として形成される過程において、周辺の農牧社会が政治・経済的にいかに国家に組み込まれ、またそれに対して、いかに抵抗をしたのかが、主な研究テーマ。農牧民の家父長制社会の中で、女性がいかに自分たちの主題性を確保してきたのかにも、関心をもつ。また近年のエチオピアの急激な経済成長の中で、地域の生態資源が、国家・農牧民社会・企業家・NGO等の間で、いかに重層的に管理されてきつつあるのかについても、研究を行っている。

2. 下田　雄次（北東北 無形文化遺産実践研究協会 代表）

【話　題】 民俗芸能の復元・復興の取り組みについて、七戸町の白石分館地区で実施している盆踊り行事復興のとりくみを事例に発表を行う。プロジェクトの経緯や当事者へのアプローチ方法、発生した課題、議論、および今後の展望などについて紹介する。

【研究歴】 ①民俗芸能を対象にした参与観察と記録映像制作：上原子剣舞踊り（青森県上北郡七戸町、2014年－2015年）。②民俗芸能の復元・復興の取り組み：上原子の盆踊り（七戸町、2014年－現在）。当該地域に伝えられた盆踊りの所作や歌の技法を復元し、地域における盆踊り行事の復興を進めた。③民俗芸能の記録撮影（青森県東津軽郡平内町、2016年－現在）。①～③は伝承用DVDを制作した。④近世武術の復元と普及活動（青森県弘前市、2016年－現在）。弘前藩に伝わる近世の居合、林崎新夢想流居合の復元／普及活動を展開中。近世武術の身体操法を解明し、その成果を地域の無形文化の継承の場に還元する試みを行っている。

3. 佐々木重洋（名古屋大学大学院人文学研究科 教授）

【話　題】 本来、教育研究と実践は対置されるものではない。知のあり方自体が大きく変わりつつある現在、研究者や大学関係者に求められるのは、教育研究の過程と成果を誰とどのようにして共有するのか、フィールドで絶えず自問自答する姿勢と、その共有手段の多様化である。

【研究歴】 2003年以来、大学院・学部を対象とした文化人類学のフィールドワーク実習もかねて愛知県の奥三河地域に通っている。2007年には東栄町の小林花祭保存会とともに伝承虎の巻としても使える『北設楽　小林花祭り』を編集発行。2011年度から2013年度にかけて、北設楽花祭保存会、関連自治体などで構成する「花祭の未来を考える実行委員会」を組織し、文化庁の補助金を得て「花祭の保存・伝承による地域活性化事業」、2014年度には「花祭の保存・伝承による次世代継承および地域活性化事業」を推進。また、2016年度には国民文化祭の一環として愛知県と文化庁が企画した「伝統文化等体験型情報発信事業」に協力し、名古屋大学の学生が体験をSNS等で一般向けに発信した。2018年度からは3か年計画で、東栄町の花祭会館リニューアル事業に関わっている。

第Ⅱ部　参加者を交えた座談会　　15:45～17:00

第Ⅰ部でかんたんな質疑応答をすませたあと、第Ⅱ部では参加者が車座になって議論します。例えば…

- ❖ 大学＝地域交流の「意義」はさまざまに言われてきたが、お互いに与えた「影響」や「効果」はどのようなものなのか。
- ❖ アフリカと国内地域の双方の事例をみてきた調査者が、草の根交流にヒントを与えうるとしたら、どのようなものが考えられるか。
- ❖ ともすれば観光資源化という「外向き」思考となる伝統文化の保存や継承について、地域社会内への波及効果にはどのようなことがあると言えるか。
- ❖ こうしたことを、ローカルな個々人・集団の小さな実践からみていくことで、どのように社会変化・価値変化のダイナミズムを理解することができるか。